

朱思本の輿地図について

海野一隆

【要約】今は失われた元代の代表的地図としての朱思本の輿地図を、明の羅洪先の「広輿図」に基づいて復原しようとするのが本稿である。広輿図は編者自身言明するように、図形の正確な朱思本図を分割し改訂増補したものである。従ってそれが収載する諸図を吟味し、そこに含まれる非朱思本図的要素を逐次排除してゆくならば、原図である朱思本図の相貌はおのずと浮び上ってくる筈である。このような過程を踏んで明らかにし得た事柄は、先ずその方格が每方百里のものであったろうということである。そして羅洪先の見た朱思本図に関する限りにおいて、その縮尺は八分百里であつたと考えられる。図は朱思本が言う如く、外国地方を描かず、同時代の「声教広被図」の如き世界図ではなかつた。図形や作図法にイスラム地図学の影響を受けなければかりか、沿革に執着する伝統的な中国地図学を忠実に継承するものであつた。そしてこの図の大きな特色と考えられるのは、元の都実の探検によつて明らかとなつた黄河河源地方の地理を、正しく中国全国の中に位置づけた点であつたろう。

は し が き

朱思本の「輿地図」は元代の代表的地図の一つとして聞えるけれども、図自体は伝存せず内容については必ずしも詳らかではない^①。ただその図を増広したという羅洪先の「広輿図」を手掛りとした研究がいくつかあるので、それらによつて大要は知り得る。中でも青山定雄博士の研究は

詳細かつ画期的なもので、広輿図とその資料の一つを同じくする「混一疆理歴代国都之図」との比較検討によつて、大まかながら朱思本図の輪郭を浮び上らせたと云つてよい。しかし具体的にその図形を彷彿たらしめるためには、なお地図に即した復原的作業が残されているように思われる。従つて私はここに、先学のこの研究を有力な出発点として、朱思本図の再構成を行なつてみようと思ふ。

そこで先ずその根拠となる広輿図について、若干の書誌学的検討を加えておきたい。

一 広輿図の成立と内容

改めて言うまでもなく、広輿図は明の羅洪先が十余年の歳月を費して、嘉靖二十年頃（一五四一）に完成した地図帖で、嘉靖三十四年（一五五五）頃初めて刊行された。その後明末までに五回版を重ね、更に清の嘉慶年間にも版行を見た。その都度多少の改訂や増補が行なわれているので、朱思本図復原の資料としては初版本が最もよい。ところが初版本と推定されるものは一部が知られるに過ぎない。すなわちフックス博士により紹介された羅振玉旧蔵本がそれで、現在その存否を明らかにしないが、地図の部分は幸い同博士によって複製されている。地図に付随する記事を含めた図帖全体については、記事の一部を除けば全く推定初版本の模写である内閣文庫所蔵本、再版本と考えられる南波松太郎氏所蔵本をそれぞれ参考にした。

さて広輿図の編纂に当って、羅洪先が用いた資料については、彼自身が述べているので明らかである。すなわち跋

九辺図（念菴羅先生文集卷十）に、

因取大明一統圖志、元朱思本李汎民輿地圖、許西峪九辺小圖、
吳雲泉九辺志、先大夫遼東蘆州圖、浦東牟錢維陽西関二圖、李
侍御宣府圖志、京本雲中圖、新本宣大圖、唐荊川大同三関圖、
唐漁石三辺四鎮圖、楊虞坡徐瀕水圖、凡一十四種、量遠近、
別險夷、証古今、補遺誤、將以歸之。（傍線筆者）

とあるのによつて、少なくともこれら十四種の地図を参照したことがわかる。これらの中でも彼が最も信頼を置いたのは、次に掲げる広輿図の自序で明らかのように朱思本図であった。そもそも広輿図なる標題は輿地図（朱思本図）を増広したものであるといふ意であり、巻首に朱思本の輿地図序（広輿図では輿図旧序とする）を掲げながら、それに続く自序（広輿図序）に自己の名を伏せたのも、朱思本図に權威を認めたと故にほかなるまい。では羅洪先をして一改訂者と思わしめたその図の一体どこに權威があつたのだろうか。それはほかならぬ図形の正確さであった。そのことを彼は自序においてははっきりと指摘している。

嘗徧觀天下図籍、雖極詳、其疎密失準、遠近錯誤、百篇而一、莫之能易也。訪求三年、偶得元人朱思本圖。其圖有

計里画方之法、而形実自是可擬、從而分合、東西相侔、不至背舛。

彼の言葉を借りるならば、朱思本図は計里画方に忠実であったが故に、地図としての価値が高かったのである。計里画方の法とは文字通り距離を測定し、地図の骨格となる方格を画くということで、中国の伝統的な方格図法を意味する。これを行なうことにより図形ははじめて正確になり、縮尺が明瞭になる。羅洪先が言うように、朱思本図には図面を覆う方格が見事に描かれ、その縮尺も明示されていたにちがいない。

彼はこの信頼できる地図を得て、地名を明代のものに改訂し、一枚図であったのを分割して図帖となした。しかし朱思本図は図形の正確さにおいては他に比を見ない地図であったとはいえ、後述するように彼が必要とした中国以外の広大な地域については、殆んど描くところがなかった。そのため彼は李沢民の「声教広被図」などを用いて絶遠の異邦を補った。また辺防に関心の高まっていた時代であったから、九辺図をはじめ洮河・松潘・虔鎮・麻陽など辺鎮の図を、前掲十四種中の関係諸地図によって作成した。し

第1表 広輿図収載地図の丁数

	羅洪先自序		初版本(再)
			版本も同じ
輿地総図	1		1
兩直隸十三布政司図	16		16
九邊図	11		11
洮河・松潘・虔鎮・麻陽諸図	5		5
黃河(運)図	3		3
漕河(運)図	3		3
海運図	2		2
朝鮮・湖漢・安南・西域諸図	4		5
東南夷図	—		1
西南夷図	—		1
計	45		48

定初刊本についてみると、序文一丁、地図四十種四十八丁、図に付随する関係記事六十八丁、合計百十七丁となっている。ところがその自序に記される地図の種類丁数はこれより少なく、いまそれを右の数字と対比すると第一表の如くである。ただし記事の部分の丁数は自序にも「副図六十八」とあって差異がない。地図におけるこの不一致は朱思本図を考える上にも見逃せないで、少しく検討を加えておこう。自序に述べるこれらの数字は、恐らく嘉靖二十年(一五四一)頃一先ず完成に漕ぎつけた稿本に関するもので、

かしこれらの図といえども基図としては図形の正しい朱思本図を用いたようである。^⑩こうして出来上った広輿図の内容を推

フックス博士が述べられるように、初版本刊行までの十余年間に朔漠図を二丁に増し、東南・西南両海夷図各一丁を新たに加えたものと考えられる。¹¹⁾ しかもこの両海夷図が声教広被図の一部を用いたにすぎないことは、既に青山博士の考証によって明らかになっている。¹²⁾ 一方朔漠図には声教広被図を利用した形跡はなく、一丁から二丁への変更の理由が判然としないが、或いは稿本完成後にこの方面に関する適当な資料が入手できたためであろうか。いずれにしてもこのことは、朱思本図の漠北が簡略であったらしいことを示唆する。これについてはのちに改めて触れるであろう。

二 朱思本図の内容

一方格 既述の如く羅洪先に認められた朱思本図の価値は図形の正確さという点であった。そしてそれは図における方格の存在によって可能となったのである。では一体朱思本図では每方何里の方格が用いられていたのであろうか。

第2表 広輿図収載地図の方格

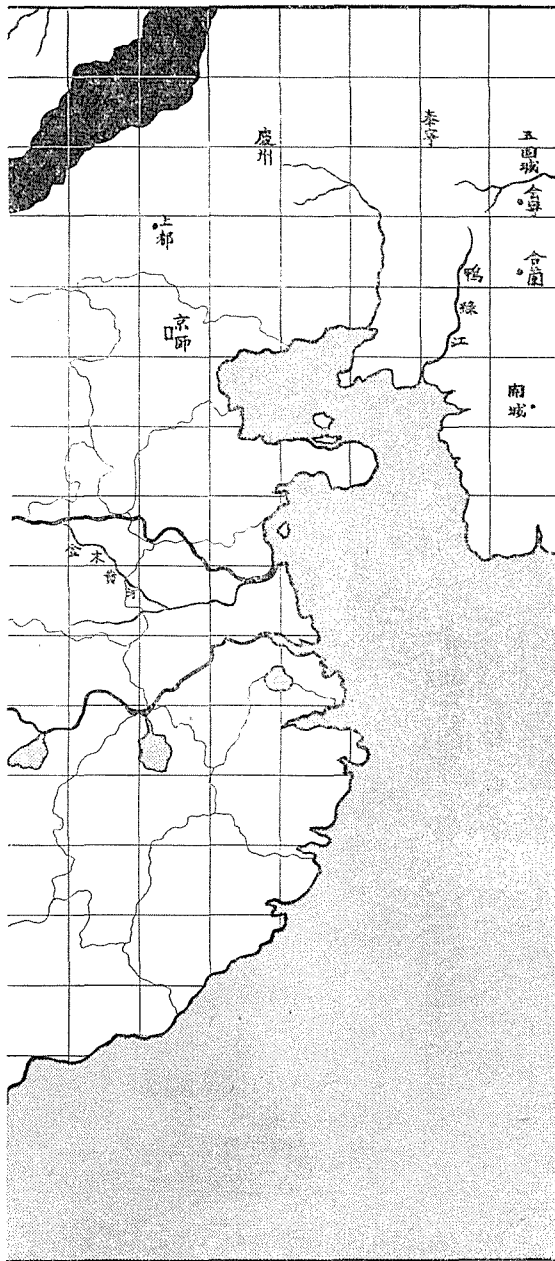
每方	地名	地図丁数
500里	輿地総図・九辺総図・西域図	3
400里	東南海夷図・西南海夷図	2
200里	黄河図(第3)・朔漠図	3
100里	二直十三省諸図・九辺諸図(薊州辺図を除く)・洮河等辺嶽諸図・黄河図(第1・2)・漕運図・海運図・朝鮮図・安南図	38
40里	薊州辺図	2

その推定には広輿図の方格が一つの手掛りを与えてくれる。何故なら広輿図の資料となった中国全図のうち、大明一統志の図には方格がなく、¹³⁾ また李沢民図も混一疆理歴代国都之図から見て方格をもたなかったと考えられるし、¹⁴⁾ 広輿図の序における、

按朱図長広七尺、不便_二卷舒_一、今掬_二画方_一、易以_二編簡_一。

という羅洪先の言葉に照らしても、方格は朱思本図の踏襲ないしは模倣であると断定して差支えないからである。

さて広輿図収載の諸図に用いられる方格は必ずしも一定しておらず、第二表に示す如く每方五百里から每方四十里に至るまで五種類に分かれる。ところが四十八丁の地図のうち、総図や外国諸図など一部を除いて、三十八丁が每方百里の方格に統一されている。



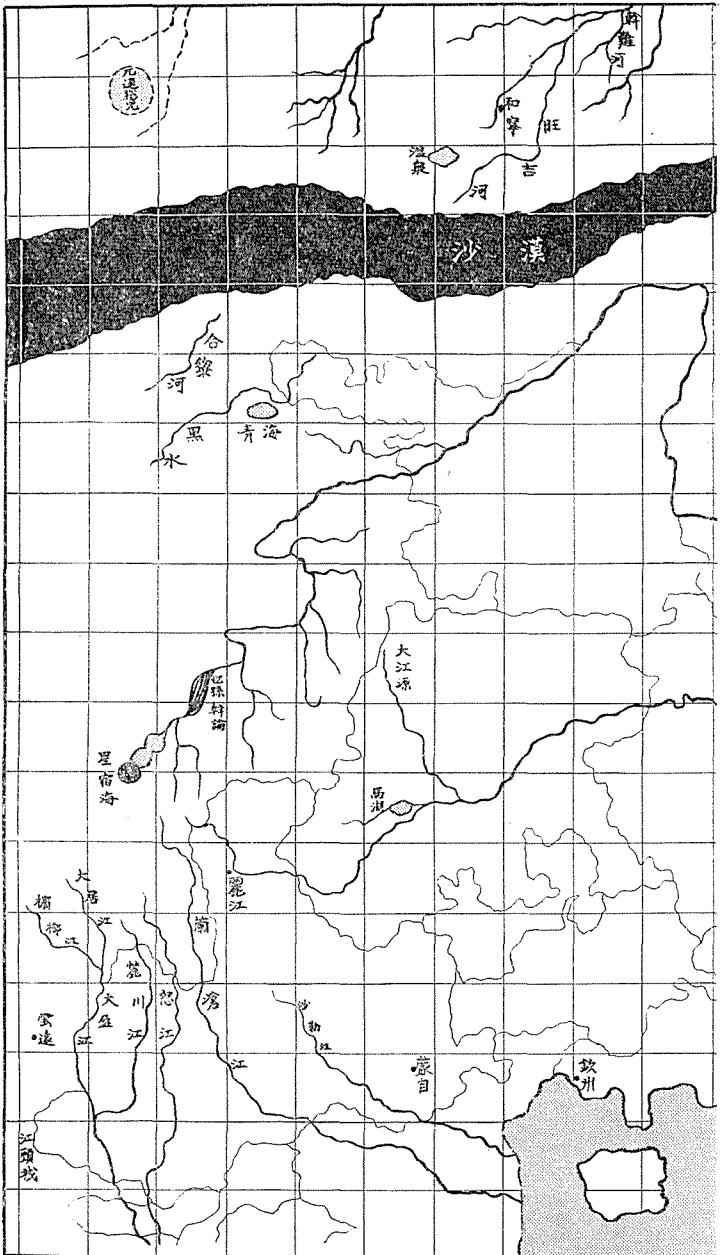
朱思本圖(輪郭)

殊に二直十三省すなわち中国本土の諸図はすべてこれに含まれ、外域としてわずかに朝鮮と安南の両図があるのみである。広輿図の中でも主要な部分を占める中国本土の図がすべて毎方百里の方格をもつことは注目すべきであろう。というのは同じく毎方百里の方格をもつ西安碑林の阜昌七年(一一三六)石刻禹跡図を想起せしめるからである。こ

の図は周知のように、禹貢の山川地名を主とする一種の歴史地図で、同時代の地図の中でもすぐれて正確な図形を示している^⑤。一方われわれは朱思本が図の作成に当って用いたという資料の中に、滄陽・安陸の石刻禹迹図の名を見出す。すなわち彼の輿地図の自序には次の如く記される。

驗諸滄陽安陸石刻禹迹図、樵川混一六合郡邑図、乃知前人所

- 一、方格は百里毎に画くべきであったが、図版の大きさを考慮して五百里毎とした。
- 二、破線で示した箇所は輿地総図によった。
- 三、省界は広輿図のものを用了。



第1図 広輿図から復原した

作、殊為乖謬、思構為圖以正之。聞魏鬱道元注水經、唐通典、元和郡縣志、宋元豐九域志、皇元一統志、參攷古今、量校遠近、既得其說、而未敢自是也。(眞一齊雜著卷二)

濫陽および安陸の兩地に存した石刻禹迹圖がともに内容を同じくする地図であったか否かはもとより、作成年代も内容もいま明らかにするべきがないけれども、図の題名と言ひ石刻であることと言ひ、その図が阜昌七年石刻禹迹圖と親縁關係にあることを思わしめる。⑩ 広興圖の図形や地名に阜昌石刻禹迹圖の痕跡と考えられるものが検出されるから、朱思本が利用した禹迹圖は恐らく阜昌禹迹圖と同系統のものであったろう。だとすればその図にも方格があり、しかも每方百里であったと推定される。朱思本の参照した図の方格が每方百里であり、朱思本圖を分割したという広興圖の各省図が每方百里である以上、朱思本圖もまた同様であったろうことは想像に難くない。では每方百里の方格をもつその図はどのような図形を示していたであろうか。広興圖中の諸圖を吟味しつつその復原を進めてゆこう。

中国本土 朱思本圖の図形を復原するためには、広興圖の中に含まれる非朱思本圖的要素を排除したのち、諸圖

を同一縮尺に統一し接合すればよい筈である。しかし順序としては、先ず広興圖の主要部分をなす二直十三省の各圖を一枚圖に復原し、これを抛り所としてその他の圖を檢討することにする。二直十三省の各圖の接合に際して、海岸線・省界などに多少不一致の箇所が見されたが、全体としての図形をゆがめるほどのものでなく、これらの図がもと一枚圖の各部分であったことを思わしめるに充分であった(第一圖参照)。このことは既に述べたように中国本土に關する限り、広興圖が朱思本圖の図形を踏襲していることを示すものであろう。広興圖には分省圖以外にも中国本土の一部を描く九辺諸圖・洮河をはじめとする諸辺圖・黄河圖・漕運圖・海運圖など計十七種があるが、これらの図の内容は黄河の上流地方を除いてすべて二直十三省の各圖のいずれかに含まれる地方であって、相互に比較してみると図形の基本的な部分において殆んど一致する。例えば遼東半島についてみても、それを描く山東輿圖、海運圖、遼東辺圖の三者ともにほぼ一致した図形を示す。また九辺諸圖は分省圖中の該当地域を拡大し、許論の九辺圖論(嘉靖十七年、一五三八刊)などを用いて増補する。九辺圖論収載圖は遼

東より長城西端に至る連続十丁の図で、紙幅の關係から図形はくずれているが地名は詳しく、広輿図の九辺諸図にその多くが採用されている。特に楡林辺図の「此東勝旧址正統以前猶守之」という註記は、許論九辺図第六のものと同一であり、同じく「吉黒衣三部兵約共万……」なる註記も、許論の同図第七に見えるものの要約に過ぎない。

このように地名や細部の図形において、増補の跡は認められるけれども、これら十七種の図が図形の基本において分省図と大きな差異を示さないのは、これらの図がまた朱思本図を基図としたことを物語るものであろう。従って逆に言えば、朱思本図の中国は広輿図に示される如き図形を備えていたと考えられる。それでは中国周辺の諸地方はどうであらうか。

中国周辺と外国地域　広輿図に収載される図のうち、中国本土以外の地域を描く図としては、朝鮮図、東南・西南両海夷図、安南図、西域図、朔漠図の六種七丁がある。これらのうち東南・西南両海夷図は、既述の如く明らかに李沢民の声教広被図に拠ったもので、朱思本図とは直接關係がないと言つてよい。そこで残り四種の図について検討す

ればよいことにならう。先ず朝鮮図を取上げると、この図には毎方百里の方格が記入されてはいるが、その図形は甚だ杜撰と言わざるを得ない。特に屈曲の少ない西海岸と二大彎入のある東海岸とは印象的である。広輿図編纂当時羅洪先が参照し得たと思われる「新增東國輿地勝覽」（朝鮮中宗二十五年、一五三一刊）の朝鮮図の整った図形とは比ぶべくもない。しかし鴨緑江を白山（白頭山）から西南流するよ

うに描く点は、それを全く西流させている新增東國輿地勝覽の図や前述の混一疆理歴代國都之図より実際に近い。

そしてこれは大元一統志の、

今考、其源出於長白山、西南流、經故婆速府東南、入於海。
（遼陽行省、鴨緑江の条）

という記載と一致する。従つて鴨緑江に關しては朝鮮側の資料よりも中国側の資料が尊重されているようである。図中の地名を検すると、中宗二十一年（一五二七）に置かれた水原郡、明宗四年（一五四九）に清洪道と改称された忠清道および同年惟新県と改められた忠州をそれぞれ旧により記しているから、一五二七—四九年の間の資料に基づいたものと思われる。この年代は広輿図が編纂された時期に

当るから、これらの地名は羅洪先によって記入されたとしてよからう。ところが北部には元代の地名である合蘭が記入されるほか、鴨綠江付近の地名や図形が海運図や遼東辺図のそれとほぼ一致する。従って朝鮮図は羅洪先が新たに加えたものではなく、朱思本図のそれがある程度踏襲したものとと思われる。恐らく朱思本図には朝鮮半島の西半分が描かれていたであろう。大きな灣入のない西海岸の輪郭が、阜昌七年石刻華夷図に類似するのは、中国における朝鮮の図的表現として定型化されたものがあったことを物語っていて興味深い。

ともあれ朝鮮図における異様な東海岸の輪郭は、朱思本図の方格に魅せられた羅洪先が平滑な西海岸を修正することなしに、方格に基づいて爾余の部分を書き足した結果と解釈してよいのではあるまいか。同時代の朝鮮製地図にもないその歪んだ図形が、本来図形を正すべき方格の生み落した奇型児であったとすればまことに皮肉なことと言わざるを得ない。朱思本図における朝鮮の描出範圍について、フックス博士は特に具体的根拠を示さないうちに、その全体が含まれていただろうと推定しておられるが、その図示

限界については後に詳述するであろう。

安南図はその内容を検すると、東都（ハノイ）を中心とするトンキン地方の図形はかなり整ってはいるが、西都（現タニエホアの北西）以南は距離・方角ともに誤りが甚しい。例えば東都の東南方にあるべき順化（フミ）・広南（クワンナム）が、それぞれその西南方に描かれる。地名は明の版図であった宣徳二年（一四二七）以前のものを主とし、多少その後の改制をも記入する。広輿図に載せる宣徳二年の行政区画関係の記述は、大明一統志のそれと一致するのでそれが利用されていることは明白である。但し大明一統志には安南図がないから、図形に関しては朱思本図を踏襲したことが一応考えられる。ところが中国国境付近が安南図と広西・雲南両図とで一致しない。例えば安南図においては、雲南省蒙自からその東方にあたる広東省欽州までが、每方百里の方格にして十六即ち千六百里であるのに対して、雲南・広西・広東三省の図を接合した場合（第一図参照）はそれが千百里に過ぎない。安南図の図形は全体に東西方向に伸びており、方格や地名を雲南省境に合致させようとすると、海岸線が海南島内を過ぎるといふ矛盾がおこる。こ

のような点から見て、安南図は朱思本図の安南を独立させたものではなく、羅洪先によって新たに加えられたものとすべきであろう。もっともこれだけの根拠から、朱思本図に安南が全く描かれていなかったとすることはできない。

後述する如く朱思本図のスペースから考えて、安南はその一部にせよ含まれていたにちがいない。けれどもそれはフックス博士も言われるように、広輿図の安南図ほど詳細なものではなく、図形も多少異なっていたであろう。^②

西域図は図の右方に描かれる黄河河源および中国西部辺境が、黄河図や西部諸省図とほぼ一致するので、朱思本図の一部分を分割したものの如く見えるが、縦横二十目を算える毎方五百里の方格から判断すれば、全く別の資料に基づいたものである。何故ならこの図は中国全土を包含する輿地総図とほぼ同じ広さの範囲を描いており、もし朱思本図にこうした西域が描かれていたとすれば、漠北や南海を広範囲に包含しない限り、「長広七尺」と言う正方形またはそれに近い外形とはならない。ところが後述する如く朱思本はその図に砂漠の西北や東南海上の異域を省略したと言っている。広輿図の西域がその図と関係ないことは、こ

の点からも肯けるであろう。また西域地名は一部明代のものを除けば、唐の道宣の「釈迦方志」遺跡篇に記すものに限られ、元代地名は全く見当らない。同書の地名には方角・距離が詳記されているから、一定の方格の中にそれらの地名を記入して地図化したものと思われる。^③要するに朱思本図は西域図に見るような図形は勿論、広大な中央アジア・インド地方そのものも含んでいなかったであろう。^④

朔漠図は満州から漠北に及ぶ東西に長い地域を内容とし、その方格は毎方二百里に描かれ、東西八十目、南北四十目を算える。その下方は中国北部諸省図の一部とも重複するので、方格に従って図形を接合させると、朔漠図と広輿図中の隣接地域図とでは殆んど齟齬するところがない。このことは一応この図が朱思本図に拠ったことを示唆するであろう。一方地名には明らかに羅洪先の増補と見られる明の成祖永楽帝の北征関係地名が含まれるが、満州の泰寧・開元、漠北の和寧・斡難（Oman）河・旺吉（Ongki）河をはじめとして元代のものが多い。殊に和寧に関する図中の註記は、内藤博士が指摘された如く、^⑤朱思本の貞一斎雜著に収める和寧積の文とほぼ一致する。さて貞一斎雜著卷一には、

既に引用した輿地図序に続いて北海積・和寧積・八番積・兩江積なる短文があるが、それらはもと朱思本図中の註記であつたらしい。何故なら八番積・兩江積の末尾はともに、
“地窄而名猥多、茲得以略”と結んであり、多數の州県が置かれていた貴州南部や広西西部のこれら兩地方の箇所に地名が充分記入できなかったための註記と思われるからである。恐らく図の余白を利用してこうした註記がなされていたのであろう。しかも北海積には朱思本図の図形を示唆する注目すべき記述がある。すなわち、

今考、夫大嶺以北、金山之東、水皆北流、赴大沢中。(中略)金山之西、水皆西流、經諸藩絕域、咸會於西海云。

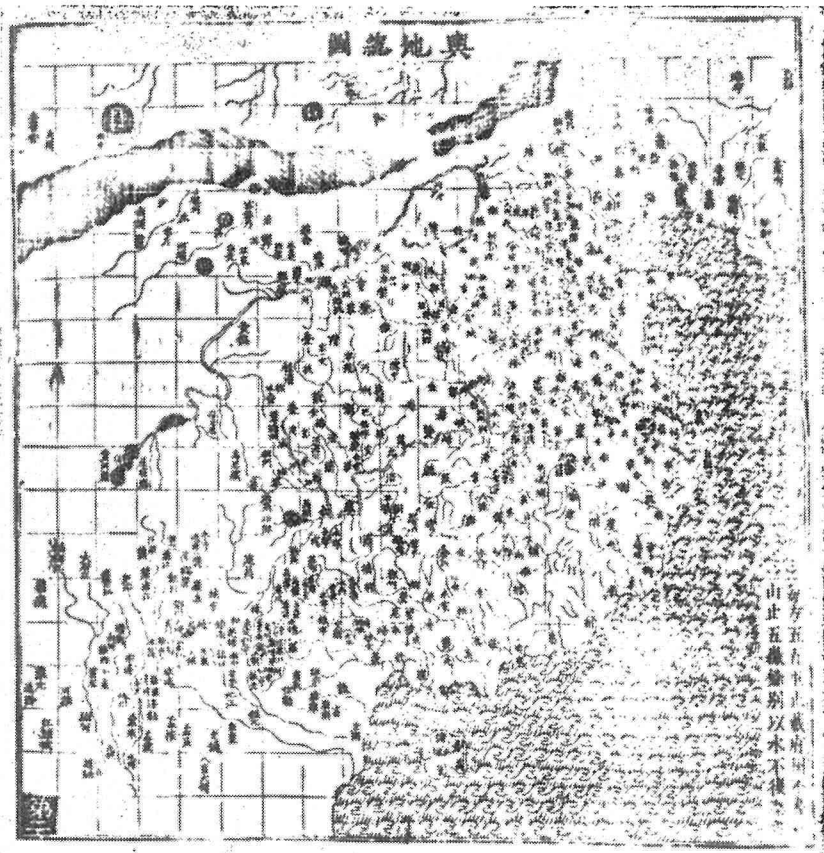
とあり、漠北の河川が金山(アルタイ山脈)の東と西で流れの方向を異にすることを述べる。一方朔漠図は金山東方の地域を内容としており、河川はいずれも東北流する如く描かれる。これを漠北の河川が東流する如く描く混一疆理歴代国都之図に比ぶれば、北流と東北流との違いがあるにしても、朔漠図の表現が朱思本の知識にかなり近いことを示すであらう。

以上の諸点から考えると、朔漠図には羅洪先による増補

がかなり含まれてはいるけれども、半面朱思本図の要素が残存していることも否定できない。ところで朱思本は輿地図序において、自作の図に示した範圍に關し、

至若瀛海之東南、沙漠之西北、諸番異域、雖朝貢時至、而遠絕罕稽、言之者既不能詳、詳者又未必可信、故於斯類、姑用闕如。(貞一著雜著卷一)

と述べる。これによると沙漠の西北は全く除外したかに見えるが、言葉の比重は諸番異域にあると思われるから、東海上や砂漠西北などの異邦と解してよからう。また和寧は元初の都で、のち嶺北行省の治所でもあつたから、同時代の中国全圖にそれが含まれていたとしても、むしろ当然のことであらう。だがこれをもって直ちに朔漠図の描出範圍がそのまま朱思本図のものであることはできない。これについては後にも検討するが、羅洪先の増補と見られる部分を除けば、確かにこの図の内容は空虚である。既述の如く羅洪先が稿本において朔漠図を一丁の図幅に納めようとしたのも、恐らくそのためであつたらう。毎方二百里の方格に縮小されているにも拘らず、朔漠図は各省図に比べて記載内容に乏しい。殊に図の上半は地図としての意味



第2図 広輿図の輿地総図

初版と推定される嘉靖34年(1555)頃の刊本による。大きさ 34.2~4×33.5cm

がないと言ってよい。資料のないままに図幅としての体裁を整えるために補われた感が深い。朱思本図には多分この部分は描かれていなかったであろう。

以上広輿図の外域諸図を検討した結果をまとめると、明らかに非朱思本図的であると判定できるものと、一応朱思本図に拠りながらこれを補訂したと見られるものとに分れる。

東南・西南両海夷図、西域図、安南図は前者に属し、朝鮮図、朔漠図は後者に属する。従って接合した二直十三省図に、朝鮮、朔漠両図の朱思本図の要素を加えるならば、朱思本図の原形は明らかになるであろう。では次にその図が包含していた地域の限界について考察することにした。

描出範圍　朱思本図が描き出していた地域的な範圍に

ついては、前掲のそれに関する彼の言明によって、凡その見当が与えられる。南海や漠北の異域は、資料の不備からこれを闕如したと言う。それは計里画方の法に則り地図の正確さを期した彼にふさわしい作図態度であった。これによってわれわれは朱思本図の主題が中国にほかならなかつたことを知るのである。事実広輿図中の諸図を検討した結果もこれを裏付ける。しかしその図が表現した四方の限界についての推定はそれほど容易ではない。ところがその有力な手掛りとなるのがほかならぬ広輿図の輿地総図である（第二図参照）。巻初に置かれるこの図は、それに続く分域図の総括図として広輿図中の諸図に示された地域を包含して然るべきであるにも拘らず、それが描示する範圍は中国とその周辺、すなわち元代の行省管轄地域に限られると言えよう。東南・西南両海夷図はもとより西域図の描く地域も全く除外されている。また朝鮮と安南はそれぞれその一部が、漠北は朔漠図のほぼ下半が描かれるに過ぎない。図形は全体に粗略ではあるが、分域図のその簡略化であることは明白である。このほか毎方五百里の方格の目が、縦十

八横十九であるから、大体正方形に近く、朱思本図の「長広七尺」という形を思わせる。図中の地名も、図の右上にあたって合蘭府・開元・泰寧、左下にあたって雲遠・蒙光・通西など、元代にのみ設置された路名を記入する。このように見てくると、この図が朱思本図と密接な関係をもっていることに気付くであろう。いなこの図こそ羅洪先によって縮小簡略化された朱思本図にほかなるまい。図形の正確という点でその図に全幅の信頼を置いた羅洪先が、その全図を巻初に掲げたとしても、何ら異とするに足りないであろう。「輿地総図」なる図題の命名にさえ、朱思本の「輿地図」が意識されているとすれば言い過ぎであろうか。いずれにせよ東南・西南両海夷図や西域図の広大な異域が、その部分すらも図上に現われないのもそれを物語るであろう。勿論輿地総図が朱思本図の輪郭を踏襲しているとしても、羅洪先の取捨を経ている以上、細部については検討を要する。図形だけでなく方格の簡略化においても原図にどの程度忠実であったか問題がある。従ってその方格・描出範圍に関しては、分域図と比較しつつ考察する必要がある。

先ず東方の限界はどの辺であつたろうか。朔漠図の右下に示される滿州の地理的知識の中には、青山博士の指摘の如く大明一統志と一致するものが認められるから、羅洪先による増補もかなりあると思われる。しかし既述の如く元代の地名も多く、殊に輿地総図では元代地名のみと言えるほどで、朔漠図ほど詳細でないにしても、この部分が朱思本図に全然なかつたとは言えまい。大明一統志でもこの地方を外夷の地として扱うように、明代では二直十三省の管轄外であつた。これに対して元代には遼陽行省の管轄区域として、元代中国の一部を形成していた。高位の道士として天子の信任を受け中央に出入した朱思本が、その中国全図にそうした地域を除外する筈はなからう。とすれば朱思本図の右端は朔漠図の右端と同様であつたと推定される。朔漠図の描く東西八千里の範圍は、東西九千五百里に及ぶ輿地総図のすべてではなく、西方の部分千五百里を欠く。これは羅洪先が朱思本図の右端から毎方百里の方格八十目までを取って朔漠図としたためであろう。この推定に誤りなければ、朝鮮半島は第一図に見るように、高麗の首府開城を含む西半分が描かれていたことになる。

次に西方の図上限界の検討に移ろう。第一図でも見当がつくように、西方の限界を決める手掛りは雲南の西部省境地方である。雲南図では孟養（元代の雲遠路）・可難・蒙索甸・江頭城などを限界とするのに対して、輿地総図・西域図・西南海夷図はこれらよりやや西方にあたる蒙光・通西をも記入する。蒙光・通西は明代には廃止されていたビルマ国境地方における元代の蒙光路軍民府ならびに通西軍民總管府の治所である。そして羅洪先が資料とした大明一統志にもこれらの地名は記されていない。恐らく朱思本図を踏襲したものであろう。しかし輿地総図その他から考えて、この付近の地名は必ずしも正確な位置に記されていないかつたように思われる。従つていま図形的に信頼の置ける雲南図の左端を朱思本図の図端とすれば、東西九千里に互り、毎方百里の方格にすれば九十目となる。一方輿地総図ではこれが九千五百里となつており、蒙光・通西をも含んでいる。従つて朱思本図は左端が雲南図幅の図端より一〜二目多く、図全体としては左右九十一〜九十二目程度であつたと推定される。

南方の図上限界はどうであらうか。先ず輿地総図につい

て見ると、最下段の方格には雲南を南下した河川が延長さ

海に注ぐ程度の簡単な図形であつたろう。

れず、地名も全然記入されない。かりにこの一段を削除し

最後に北方の限界であるが、既に述べたように朱思本図

ても、海南島は完全に残っており図形には影響がない。従

の上部を独立させ増補したと考えられる朔漠図は全体に散

つて図幅の体裁上付加された一段という印象を受ける。し

漫な図形を示すが、特にその上半は地図としての体裁を欠

かも雲南図の下端の方格線は海南島のほぼ二目下を通過し、

くほど内容が空虚である。この部分を省いている輿地総図

輿地総図における下端五百里を画する東西線とほぼ一致す

は、恐らく朱思本図の描出範囲をそのまま継承したもので

る。これらのことから判断すると朱思本図の下端は、ほぼ

あろう。和寧を含む朔漠図の中央部以南が朱思本図の描く

雲南図のそれに近かつたようである。雲南図では怒江（サ

ところであろうという推定については既に述べた。いまこ

ルウィーン川）と、麓川江・大盈江（ともにイラワジ川上流）

れを肯定して輿地総図とほぼ同じ上限を朔漠図に求め、第

などの合流河川とが二本のまままで終るが、輿地総図ではそ

一図において雲南図の下端までの百里方格を数えると八十

れらが更に合流して一本となるところまで描かれる。従つ

九目となる。もし雲南図の下方に一目加えたものが朱思本

て朱思本図は雲南図の範囲より多少南方へ及んでいたかも

図の下限だとすれば九十目になる。ところでさきに推定し

知れない。第一図ではそれを考慮して雲南図下端より一日

た如く朱思本図の東西は百里方格九十一〜二目である。正

（百里）だけ増してある。これがそのまま朱思本図の図端

方形もしくはそれに近い方形であつたこの図の縦横として、

とは言えないにしても、それほど隔たるものではなからう。

これらの数字はまことにふさわしいであろう。朱思本図の

とすれば安南は確かにその北半が含まれる。しかし既述の

北方限界はまさしく輿地総図に示される如きものであつた

如く広輿図の安南図と図形的に同じものが描かれていたの

と考えられる。

ではなく、雲南図の右下部や輿地総図に見られるように、

以上の推定に誤りがなければ、朱思本図の描出範囲は東

沙勒江（ソソコイ川）と蘭滄江（メモン川）がほぼ平行して

西九千百里〜九千二百里、南北八千九百里〜九千里であつ

たことになる。これを輿地総図の東西九千五百里、南北九千里に比べると、東西がやや短くしかも半端な数である。

しかしこれは輿地総図が每方五百里の方格に過不足なく合致するよう作図された結果であろう。朱思本図の東西・南北がこのように五百里の倍数であったと考える必要はない。何故なら前掲の阜昌石刻禹跡図でも每方百里の方格が縦七十三、横七十というように、必ずしも五や十の倍数とは限らないからである。

縮尺 このように朱思本図の東西・南北の実際の長さからわかれば、縦横七尺という図の大きさから、縮尺はおのずから明らかとなろう。中国での伝統的な縮尺の表示法は一吋百里というように図上距離と実地距離を併記する文字式であるから、方格の目数でもって七尺を割ればよい。勿論「長広七尺」という表現はそれほど厳密なものでなからうから、その結果に端数が付かぬようにすると、八分という数字が得られる。すなわち朱思本図の縮尺は八分百里（二二五万分の二）であり、その大きさは縦七尺一寸二分七尺二寸、横七尺二寸八分七尺三寸六分だったことになる。ところで中国地図学史上特筆大書される三世紀の裴秀の

「地域方丈図」や唐の賈耽の「海内華夷図」（八一一年）の縮尺は一吋百里（一八〇万分の一）であった。³⁴ 古今の地誌や地図を渉猟した朱思本がこれを知らなかった筈はなからう。作図上でも便利な一吋百里という縮尺を用いたのではなからうか。ではここに得られた八分百里なる縮尺を如何に解すべきか。朱思本図の完成から広輿図の編纂まで二百年以上の歳月が経過している。羅洪先の見た朱思本図は原本ではなく模写本であったに違いない。その模写本は原図をやや縮めて八分百里の縮尺に改めていたのであろうか。

黄河河源 ところで未だ検討を加えなかった図に黄河図第三がある。黄河図第一第二は黄河の三門峽以東の河道を图示しており、黄河を含む各省図と一致するから問題はないけれども、その第三は星宿海に発する黄河の上流部を含んでいて、方格も第一第二の每方百里とは異なり每方二百里となっている。西寧の南方「番名」亦耳麻不莫刺」と記される山地付近で大きくS字型に曲流する黄河の表現はかなり実際に近い。また星宿海に接する瓢箪型の「阿腦兒」（阿刺腦兒の誤）、教本に分流したのち合して一本の流れとなる「也孫幹論」（詠言九渡——元史地理志河源附録）の部分もまた

われわれの眼をひく表現である。この新しい河源知識は果して朱思本図のものであったらうか。

ここに見られる河源知識は、明らかに至元十七年(一二八〇)都実の探検によって得られたものであり、羅洪先もそれに関する元史地理志河源の記事を図の余白に要約している。そしてそれに続けて、

朱思本姓名、因河源記始伝、其為_レ図与_レ所記、山水道里不_レ少差舛、特存_レ之、以代_レ輜軒之対_一。

と述べ、黄河図を掲げた理由を説明する。元史地理志河源付録によれば、都実の探検結果を記録したものに、潘昂霄の『河源志』と朱思本の撰述とがあり、両者は互いに詳略があると言う。幸い前者は元の陶宗儀の『輟耕録』(至正二十六年、一三六六)に柯九思の序および地図を付した完全なものが収められるので内容を知ることができる。³³⁾これに反して朱思本の河源記は、その断片が元史地理志に引用されるのみで、成立の時期も詳らかでない。

さて潘昂霄の河源志は延祐二年(一二三一)に成り、元統元年(一二三三)柯九思の序を付して刊行されたものらしく、本文は極めて簡略で、地図も星宿海に発する黄河を

臨洮付近まで描くがそれほど精密ではない。³⁴⁾延祐二年(一二三一)と言え、十年に亙る朱思本図の作成期間至大四年(一二三二)〜延祐七年(一二三〇)の丁度半ばにあたる。朱思本は河源地方を描くために恐らくこの書を見たであろう。しかし方位距離を明確に示さないその本文および粗略な付図は、作図の資料として満足すべきものでなかった。そこで彼はより詳細な都実の探検報告を探し求め、それを入力することができた。元史地理志河源付録に、

臨川朱思本、又從_レ八里吉思家、得_レ帝師所_レ藏梵字圖書、而以_レ華文_レ訳_レ之。³⁵⁾

とあるのはその間の事情を伝えるものであろう。元史地理志に引用される朱思本の河源記の文が、方位距離を詳細に記し、潘昂霄のそれに比べて遙かに詳細であるのもその故にほかなるまい。言うならば朱思本の河源記成立の契機は、彼の輿地図作成にあったのである。

潘昂霄の河源志に河源図が付載されるように、朱思本の河源記にも地図があったであろう。³⁶⁾帝師所_レ藏梵字圖書、³⁷⁾という元史の記述もそれを支持するようである。しかし羅洪先がその黄河図に記した前掲文中で図と言うのは河源記

の付図ではなく、記する所と言うのも河源記そのものを指すのではなからう。何故ならその河源に関する記述が元史地理志河源付録を一步も出ず、朱思本の河源記そのものを参照した形跡が全く認められないからである。従ってその図というのは明らかに朱思本の輿地図であり、その記する所というのは元史地理志に引用される朱思本の記述と考えられる。かりにそれが朱思本の河源記であったとしても、これをもって直ちに朱思本図に都実のもたらした新しい河源知識が採用されていなかったとすることはできない。河源に深い関心を示した朱思本がその輿地図に四十年前の都実の探検を無視するとは考えられないからである。そして第一図でもわかるように、それを図示するスペースは充分にあった。

なお羅洪先は前掲の如く朱思本の記述と図との間に差異があることを指摘するが、その一つは河源としての星宿海的位置であろうか。記述にはそれが「直四川馬湖蠻部之正西、三千余里、雲南麗江宣撫司之西北、一千五百余里」となっているのに対して、復原図（第一図）では、馬湖の西約二千里、麗江宣撫司の西北約一千里となる。作図に当って

朱思本がその翻訳した記録よりも添付されていた地図に従ったためであろうか。いずれにせよ朱思本図は都実の報告に基づく新しい河源知識を、はじめて採用した中国全図としての榮譽を担うべきものであったろう。それにしても甘肃西部に黄河とほぼ平行する如く描かれる合黎河・黒水は、禹迹図の踏襲かと思われるが、一般に地図がいかに古い知識を永く伝えてゆくかを示す例として興味深い。

三 朱思本図の性格と意義

以上のように見ると、広輿図に基づいて復原した第一図は図示地域の限界において多少の差異があるとしても、朱思本図の図形の大略を再現していると考えて差支えなからう。ただ省界および黄河下流の河道は、広輿図における明代のものをそのまま用いた。この図でもわかるように、阜昌石刻禹跡図との図形的近似から、朱思本の見た禹迹図がこれと同系統の図であったとしたさきの推定は正しいであろう。朱思本は地図の作成に当り、図の骨格として禹迹図を選んだと思われる。しかしその図は禹貢関係の地名を主題とする歴史地図であった。従って新鮮で詳細な内容を

盛り込むためには別の資料を必要とした。その資料の一つが輿地図序に掲げられる混一六合郡邑図である。この図も現存しないので作成年代や内容は不明であるが、宋の陳元靚の『事林広記』巻二「江北郡県」の条に、

若欲觀天下之大、則有六合混一図在、非此而止。(傍点筆者)

と述べる六合混一図がそれであるとすれば、かなり詳細な内容であったことが想像される。このほか参照資料として水経注・通典・元和郡県志・元豊九域志など前代の地誌・資料を列挙しているから、朱思本は現勢地理だけでなく、沿革にも充分関心を払ったことがわかる。それは輿地図作成に先立つ大徳元年(一二九七、朱思本二十五歳)、既存の統志の不備を嘆じて、みずから古地誌を涉獵して「九域志」八十巻を編纂した精神と相通するものであろう。彼は九域志の自序に次のように述べている。

況乎郡国州縣、自開闢以來、其間建置沿革、混合瓜分、世異代殊、不可枚數。所以誌疆宇者、往往校勘少疏、使漏遺弥広、思本竊有慨焉。因取元和郡県志、以及太平寰宇、方輿勝覽、天官輿地諸書、詳加檢校、思欲輯理一畫、以附諸

君子之後。

朱思本図が今地名だけでなく古地名をも記入した歴史地図としての一面を備えていたことは疑いなからう。過去の地名に関心を示すのは中国の地図に見られる伝統的性格であり、朱思本図もまたその例外ではなかった。それは単に地名だけでなく、作図の精神・態度についても言える。

元代は言うまでもなく史上空前の大版図を有した時代で、人々の地理的視野は大きく亜欧に広がった。そしてギリシヤ・ローマの地図学を継承したイスラム地図学が中国へ伝来した時期でもある。来住したペルシヤ人札馬刺丁(ʿAmīr ḥd-Dīn)が、至元四年(一二六七)西域儀象の一として、
「苦来亦阿児子」(Kurah-i-anzバルシヤ語で地球儀の意)を製作し、同二十四年(一二八七)秘府纂修地理図志監官に任ぜられたことを記録は伝える。また現存の地図の中にも、ヨーロッパやアフリカなどイスラムの世界地図を踏襲する前掲の混一疆理歴代国都之図その他、イスラム経緯線地図に倣った「元経世大典地里図」(経世大典の完成は至順二年、一三三二)など、当時の地図文化におけるイスラムの影響を偲ばせるものはいくつかある。

朱思本が生きたのはこのような時代である。彼の図にイスラム地図学の影響を認めようとするのも故なきことではない。^⑬しかし既に明らかにした如く、その図は伝統的な方格図で古典的中国とその近隣を描くに過ぎず、元の四大藩國の領土にさえ関心を示さない。これは一体どうしたことだろうか。彼は太徳七年(一三〇三)頃から至順二年(一三三二)頃まで、天子の命を奉じて名山大川を祀るために地方に赴くことはあったが、本拠は大都に置いたと言われる。輿地図作成の時期(一三一〇〜一三二〇)はまさにこの間であり、天子の信任を受けた道士としての地位から言っても、中央の各種機関が蔵する西方伝来の新資料を利用することは可能であつたらう。しかし彼はそれらに積極的な関心を示さなかつた。これは恐らく道士と言う彼の身分と無関係ではなからう。何故なら本来土俗的色彩の強い道教には、新しい外来文化に対して批判的態度をとる傾向があるからである。殊に彼の所屬した南方道教は、これと対立した全真教に比べて保守的性格の濃い一派であつた。^⑭そして河源に對する彼の関心も、或いは名山大川を祀つた道士であることと関連するのではなからうか。

いずれにしても、広輿図から復原できる朱思本図に関する限り、イスラム地図学の影響は全く認められない。ただ伝統的な方格図法の再認識において、小川琢治博士の指摘の如く経緯線のあるイスラム系地図が与かつた可能性を想定し得るが、今の段階では否定的な要素が多いと言わざるを得ない。^⑮要するに中国古来の方格図法を正しく後世に伝えた点、都実のもたらした新しい河源知識を恐らく始めて中国全圖に位置づけた点に、この図のもつ地図学史の意義があつたと言つてよからう。

結 び

以上述べたところによって、朱思本図の内容や性格は明らかになつたと思うので、ここに推定結果の要点を記して結びとしたい。

一、朱思本図は毎方百里の方格を有し、その縮尺は羅洪先の見たその図に関する限り、八分百里であつた。

一、圖の描出範圍は、東は合蘭府・五國城、西は雲南西部境界の雲遠・蒙光・通西・江頭城、南は海南島・安南北部、北は和寧北方約六百里に及んでいた。その方

格の目数で言えば、東西九十一〜九十二、南北八十九〜九十である。換言すれば朝鮮の東半、安南の南半はもとより、広輿図の東南・西南両海夷図、西域図が表現する如き広大な異域は全く含んでいなかった。

一、図形および作図法にイスラム地図学の影響を受けなればかりか、中国の伝統的地図学に忠実な歴史地図的色彩の濃い中国全図であった。

一、都実の探検がもたらした新しい河源知識を、中国全図に正しく位置づけた恐らく最初の図であった。そして朱思本の河源記こそはその過程における輝かしい一つの労作であった。

願れば数々の推測に際して思わぬ過誤を犯しているかも知れない。諸賢の御叱正を得て補訂を重ねることができれば幸いである。終りに、貴重な資料の撮影を許された内閣文庫当局・南波松太郎先生、御教示を賜った室賀信夫・森鹿三両先生はじめ多くの方々に深い感謝の意を表したい。

① 江西省竜虎山の上清宮には石刻の朱思本図があったらしいが、咸豊七年（一八五七）以前に失われたことが知られている。すなわち『鉄琴銅劍樓藏書目録』（咸豊七年序）巻二十二頁「翁雅著の条に、//思本、（中略）嘗以周遊天下、攷數地理、竭十年之力、著有輿地圖二卷、

刊石於上清之三華院。惜今不伝。//とある。こゝに『輿地圖二卷』と記すが、朱思本図は『長広七尺』の大図（羅洪先広輿図序）であるから、恐らく広輿図の体裁と混同したものであろう。なおこの記事は呉隆氏が発見して以来、しばしば引用される。

内藤虎次郎著吳隆訳補 地理学家朱思本 国立北平圖書館々刊 七卷二号 一九三三年

また内藤虎次郎博士は、姚際恒の「好古堂書目」地理部に『輿図元朱 大本一本』とあるところから、朱思本の原図が清の康熙年間まで存したとされる。（内藤虎次郎『地理学家朱思本』『読史叢録』所収、昭和四年）しかしこれについては王庸氏が疑念を抱くように、にわかに賛成できない。（王庸『中国地図史綱』一九五八年 七二頁）何故なら羅洪先の広輿図を朱思本の輿地図と誤る例が他にもあり、大本一本と言えはやはり書冊を意味すると思われるからである。例えば「千頃堂書目」（清、黃虞稷撰）が「朱思本 広輿図二卷 臨川人」と誤記する如く、好古堂書目の『輿図』も広輿図のことではなからうか。

② 内藤虎次郎『地理学家朱思本』『読史叢録』昭和四年、青山定雄『元代の地図について』『東方学報』東京第八冊 昭和十三年、Walter Fuchs: 'The "Mongol Atlas" of China by Chu Ssu-Pen and the Kuang-Yü-T'u, Monumenta Serica, Monograph VIII, 1946.

③ 自序に『山中無_レ力_レ 儲書_レ 積_レ十余寒暑_レ 而後成。』という。

④ 嘉靖四十年（一五六二）の胡松の広輿図序文に『念_レ董羅子_レ以其_レ二十年前所_レ輯_レ見_レ寄、且病_レ困_レ軼_レ兼_レ摘_レ舛_レ誤_レ俾_レ余_レ刊_レ補。』とあるのに基づく。（W. Fuchs; Op. cit.）

⑤ 掲載する統計の最も新しい年代が嘉靖三十二年（一五五三）十一月であるから、その翌年以降の刊行にちがいない。また再版が嘉靖三十七年（一五五八）であるから、下限もおのずから明らかとなる。（W.

Fuchs; Op. cit.)

⑥ 刊行年次および各版本の内容を比較し易いように表示すると次の如くである。

版	刊年	序文	地図の種類と丁数	備考
一	嘉靖三十四 (一五五五)頃	朱思本・羅洪先	四十種	全体百十七丁よりなる
二	嘉靖三十七 (一五五八)	同	右	第百十七丁に嘉靖戊午南京十三道監察御史重刊とある
三	嘉靖四十 (一五六二)	右のほか胡松・徐九臯	四十三種	琉球図・日本図・華夷
四	嘉靖四十五 (一五六六)	三版のほか霍冀・韓君恩	五十二丁	総図を増補 桂莠の図叙と許論の九
五	隆慶六 (一五七二)	同	右	亡佚、二巻は百五丁
六	万曆七 (一五七九)	四版のほか錢岱	同	注による 一卷序文とも百七丁、 二巻百六丁
七	嘉慶四 (一七九九)	六版のほか章学濂	同	六版の模刻本、章学濂 の序文に嘉慶三年とす る異版あり

主として W. Fuchs; Op. cit. による。

⑦ W. Fuchs; Op. cit. なお左記の論文にも写真図版があるが、小さくて見にくい。またこれは既にしばしば引用している Monumenta Serica の前掲論文の未定稿というべきものであり、本稿で Fuchs 論文と「うのはすへ」 Monumenta Serica 掲載のものを指す。

W. Fuchs: Die Ausgaben des Ming-Atlasess Kuang-yi-tu 稲葉博士選歴記念満鮮史論叢 昭和十三年

⑧ 初版本と推定されるものとの大きな相違は、嘉靖四十年(一五六一)に胡松が加えたと考えられる按語を、図の余白などに記入する点であ

る。但し嘉靖四十年刊本の模写でないことは明白である。これらの細かい考証については煩瑣を避けて省略する。なお模写の時期は、南直隸輿図の標題下に同じ筆で「今江南省」と註記するのによって、江南省の置かれていた清の順治二年(一六四五)〜康熙六年(一六六七)の間と考えられる。

⑨ 刊記のあるべき第百十七丁の左半分が失われているので、断定はできないが再版本に間違いはない。その考証も本稿の論旨と直接関係がないので省略する。

⑩ 九辺および洮河などの辺鎮図合計十四種は、場所的に中国内部または辺境で、広輿図の二百十三省の各図のいずれかに含まれており、比較してみると図形には大差がない。朱思本図の部分を拡大して、地名・山岳・関鎮・衛所などを増補したものと考えられる。例えば九辺諸図についてみると、許論の『九辺図論』所載図(跋九辺図の許西峪九辺小図とはこれを指すのであろう)を利用しては明らかであるが、それは専ら内容の増補においてであって、総巻に近い形式の許論図の図形と、方格をもつ広輿図のそれとは懸隔が甚しい。

⑪ W. Fuchs; Op. cit.

⑫ 青山定雄 前掲論文

⑬ 海野一隆 「天理図書館所蔵大明国図について」『大阪学芸大学紀要六号』昭和三十三年

⑭ 羅洪先が資料としてその名を挙げてはいないが、明らかに彼が参照したと思われるものに嘉靖八年(一五二九)の桂莠の「皇明輿図」があり、それは大明一統志の図に多数の地名を増補した図を取載する。朱思本図の地名の改訂に利用されたかも知れぬが、方格・図形の点では全く関係がない。すなわちこの図も大明一統志と同じく方格はなく図形も精密でない。

⑮ 混一疆理歴代国都之図は権近の跋によって明らかのように、主とし

て図形を李済民の声教広被図に、沿革を簡清藩の混一疆理図に拠って、建文四年（一四〇二）に作成された図である。（青山定雄「前掲論文」）

⑮ Ed. Chavannes: *Les Deux Plus Anciens Spécimens de la Cartographie Chinoise*, B. E. F. E. O. III, 1903.

青山定雄『唐宋時代の交通と地誌地図の研究』昭和三十八年 五六九～五七七頁

⑯ 青山博士は、滄陽が字文周に始置された県である所から考えれば、阜昌石刻禹跡図の如く賈耽図の系統に属するものであらうと推定される。（青山「元代の地図について」）

⑰ 中国西北の黒水・弱水（広輿図では合黎河）、岷山を水源とする揚子江、オルドス北方の東・中・西の三受降城など、阜昌禹跡図と広輿図との類似点は二三に止まらない。これについては後にも触れる。

⑱ 東南・西南両海夷図の図形および地名は、その殆んどすべてが混一疆理歴代国郡之図またはこれと同系統の天理図書館所蔵大明国図に見出せる。従って両海夷図が声教広被図の一部分を独立させたものであり、羅洪先による改竄増補が殆んどないこともわかる。これらの図の相互関係については、前掲の拙稿（「天理図書館所蔵大明国図について」）を参照されたい。

⑲ 図形は勿論地名も新增東國輿地勝覽の図と一致するもの少ない。

青山博士は地名を一四七二～八九年のものとされたが、これは光州（全羅道）が成宗二十年（一四八九）に光山県と改められ、のち燕山七年（一五〇一）旧に復したのを、光山県と改められる以前の光州と考えられたのである。博士はまた広輿図の朝鮮図が東國輿地勝覽の図もしくは同系統の図を参照したものであらうと推定されたが、上述の如くその関連性は乏しい。（青山「元代の地図について」）

⑳ 朝鮮図の上部は朔漠図の右下隅の部分とほぼ重複し、朔漠図では合蘭のほかには元代地名として雙城（双城）が記される。

⑳ Ed. Chavannes; *Op. cit.*

青山定雄「前掲書五六九～五七七頁」

㉑ W. Fuchs; *Op. cit.*

㉒ 図中大竜池の右傍に「瞻部一州」という意味不明瞭の註記があるが、これは釈迦方志の「此川（波羅羅川）在大葱嶺上、瞻部一洲地最高也。中有大竜池、……」という記述に基づくものである。版刻の際の脱落かも知れぬが、またこの図が羅洪先によって釈迦方志から直接作図されなかったことを示しているようでもある。何故なら西域・インド方面の地図としては、古く宋代に「仏祖統紀」の西土五印之図があり、同じ明代には「法界安立図」の南瞻部洲図などがあって、釈迦方志を資料とした同系統の図の存在が肯定できるからである。

室賀信夫・海野一隆「わが国に行われた仏教系世界図について」『地理学史研究』第一集 昭和三十二年

㉓ 青山・フックス両博士ともに、西域図を朱思本図の一部と推測しておられるが、図を十分に検討した結果ではないようである。

㉔ 図中の「成祖北征至此」という註記でも判るが、地名は金幼孜の「北征録」「後北征録」に掲げるものと一致する。恐らく資料はこの両書であらう。

㉕ 内藤虎次郎「前掲論文」

㉖ 青山定雄「元代の地図について」（前掲）

㉗ 青山定雄「同右」

㉘ 孟養は明の孟養軍民宣慰使司で、元の雲遠路軍民總管府を改称したものである。（明史卷四十六地理志）輿地總図は雲遠とし、雲南図は孟養として「即云遠」と註記する。後者は朱思本図に雲遠とあったのを羅洪先が改訂したものであらう。

㉙ 可難は恐らく元代の六難（路甸）の誤記であらう。とすればこれも元代の地名であるから朱思本図の踏襲と見られる。

③ サルウィーン、イラワジの両河が合流するのは勿論実際と異なるが、混一疆理歴代国都之図も同じ表現をとるから、この時代にはそのように考えられていたのであろう。

④ 内藤虎次郎『賈魏公年譜』『小川博士遺稿記念史学地理学論叢』昭和五年、森鹿三『裴秀禹貢地域図のスケールについて』『東洋史研究』三卷五号 昭和十三年

⑤ 中国における河源知識の変遷については左の如き論考がある。

石田幹之助『黄河の水源及び崑崙山に関する支那人の知識の変遷』『史学雑誌』二十五編八ノ九号 大正三年、小川琢治『黄河水源問題』『支那歴史地理研究』続集 昭和四年、藤田元春『河源論』『内藤博士頌寿記念史学論叢』昭和五年

⑥ 従来潘昂吉の河源志は輟耕録の著者陶宗儀編する「説郭」所取ものが知られるが、通行本の説郭および同種の叢書のそれは、柯九思の序を欠いたり本文を簡略にしたりしたのが多く、地図も収載されない。たゞ民国十六年商務印書館の明鈔本による排印本は語句に省略もなく地図もある。しかしその図は粗略で輟耕録に収める同じ図に比べて遙かに劣る。輟耕録には幸い景元刊本が二種あるので、それによって河源志の原本に最も近いテキストに接し得る。

⑦ 黄河源と題する一丁のこの図は南を上にし、河道・山岳を描き方格はない。河幅を太く誇張する点中国的な地図である。

⑧ 八里吉思はラマ教とチベットを管理した宣政院使の職にあった人物であり（元史卷二〇五）、元代の帝師にはラマ僧が任命されたことなどから考えても、梵字図書というのは内藤博士の推定の如くチベット字のことであろう。野上俊静・稲葉正就『元の帝師について』『石浜先生古稀記念東洋学論叢』昭和三十三年、稲葉正就『元の帝師について——オーラン史を史料として——』『印度学仏教学研究』八巻一号 昭和三十五年

⑨ 泰定元年（一二三四）刊「翰墨全書」所載地図の河源は崑崙山としており、混一疆理歴代国都之図では星宿海という註記があるが、積石山に發する如く描き図形的には曖昧な表現をとる。李沢民図・僧清澗図ともに朱思本図の如き新鮮詳細な河源知識を採用していないかったのであろう。

⑩ 合黎河は卓石石刻禹跡図では弱水と註記され、合黎山はその畔に描かれる。禹跡図の黒水は図の左上を西流し、一旦図幅の外に出たのち再び左下に現れて東南流するが、広輿図では左上の部分のみ図示され、しかも図端まで流れない末無用となっている。禹跡図の徒らな模倣がこうした結果を生んだのであろう。

⑪ 朱思本図における河道は、その図の完成時期（延祐七年、一二三〇）から考えて、渦河・颶河を經由して淮河に入るものではなかったろうか。それが金の天興三年（一二三四）→元の泰定元年（一二三四）の河道だからである。広輿図の黄河図には旧河道が幾筋も示されるが、そのうち『金末黄河』と註記されるものがこれにあたる。

⑫ 鄭肇経『中国之水利』民国二十八年 三〇ノ三一頁、岑仲勉『黄河変遷史』一九五七年 四五四ノ四五頁

⑬ 『事林広記』は成立年代不詳であるが、掲載する路名および宋の周弼の『三体詩』（淳祐十年、一二五〇）の凡例などから判断すると、一一三五ノ五〇年頃に成ったことがわかる。また『三体詩』の凡例に「即鑿以六合混一図并事林広記等所載。」（傍点筆者）

とあり、朱思本の見た図がこれと同種のものとすれば、この頃作成され流布していた図であらう。右の両書には極めて粗略な中国全国図が収載されるが、題名も異なっており六合混一図を簡略化したものではなからう。

⑭ 海野一隆『江戸時代刊行のシナ図』『大阪学芸大学紀要』九号 昭和三十六年

なお青山博士は朱思本がその図の所在地を樵川または建安とすると
ころから、宋代のものと推定されるが、筆者の見解を支持する一つの
根拠となろう。(青山「元代の地図について」前掲)

④① 張國淦編著『中國古方志考』一九六二年 一二三頁

朱思本『九域志』八十卷のうち残本は八卷に過ぎないと言う。(同

右書同頁所引清蔣光煦「東瀛叢記」、および邵憲辰撰・邵章統録『增訂

四庫簡明目錄標注』一九五九年 二八一頁)

④② 田坂興道「東漸せるイスラム文化の一側面に就いて」『史学雑誌』

五十三編四十五号 昭和十七年

④③ 青山定雄「元代の地図について」(前掲)、海野一隆「天理図書館所

蔵大明国図について」(前掲)、高橋正「東漸せる中世イスラーム世

界図」『竜谷大学論集』三七四号 昭和三十八年

④④ 小川琢治「支那地図学の発達」『支那歴史地理研究』初集 昭和三
年 J. Needham: Science and Civilization in China, Vol.
3, 1959, p. 582

小川博士はアフリカの南部を含む広輿図の西南海夷図を朱思本図の
踏襲と考えられたためである。ニードム博士も同様の誤解をしておら
れる。

④⑤ 内藤虎次郎「地理学家朱思本」(前掲)

朱思本は輿地図序において次の如く述べる。

絲シ琴シ天シ子シ命シ、詞シ高シ、南シ至シ於シ桐シ柏シ、又シ南シ至シ於シ祝シ融シ、至シ於シ海シ。

④⑥ 木村英一博士の教示による。

④⑦ 小川琢治「支那地図学の発達」(前掲)

(大阪大学助教授)

style, were introduced into Japan as they were. As in Japan, at first, the four-cornered *Chi-Nei* system of *P'ing-Ch'êng* style was established, and then introducing the *Yeh* style *Chi-Nei* was established as including four or five countries near the Capital *Kinai* 畿内 in *Taika* Reformation 大化改新 was the *P'ing-Ch'êng* style and that in *Asuka-Kyo* 飛鳥京, *Heijô-Kyô* 平城京, or *Heian-Kyô* 平安京 was the *Yeh* style.

Einleitung in die Forschungen des Harpalos

—Chronologie—

by

Yasumi Nagai

In den Studien des Harpalos, die für das Verständnis der damaligen attischen Geschichte so sehr wichtig sind, daß man darüber lange über ein Jahrhundert diskutiert hat, bleiben jedoch noch einige unklare Fragen wegen Mangels an Quellen und im besonderen über die Festsetzung der bis jetzt noch nicht anerkannten Chronologien.

Durch eine jüngst erfolgte Entdeckung, die in der Festsetzung der Chronologie eine große Rolle spielt, wird man aber die Geschichte des Harpalos von neuem abfassen müssen; es ist dies die genaue Festlegung des Datums der Olympischen Spiele im Jahre 324 v. Chr. Damit hat E. Badian (JHSt. 1961, 16 ff.) neuerlich die Chronologie der Geschichte des Harpalos festzusetzen versucht, die m. E. noch einiger Zusätze bedarf.

Hier möchte ich die Chronologie durch kritische Betrachtung der Quellen und der bis jetzt erfolgten Studien kurz ergänzen.

Reconstruction of *Chu Ssu-pên's* 朱思本 Map of China

by

Kazutaka Unno

Chu Ssu-pên's 朱思本 *Yü-ti-t'u* (輿地圖, Terrestrial Map), one of the representative maps brought out under the Yüan Dynasty, is no longer extant but survived by the *Kuang-yü-t'u* (廣輿圖 Enlarged Terrestrial

Atlas), an atlas in which *Lo Hung-hsien* 羅洪先 under the Ming Dynasty divided, enlarged and revised the original map. An attempt, therefore, was made by the author of this paper to reconstruct *Chu Ssu-pên's* map on the basis of this atlas and the resultant findings are here reported.

1) The scale of the grid of this map was 100 *li* 里 to the division. So far as the copy of *Chu Ssu-pên's* map to which *Lo Hunghsien* referred was concerned, its reduced scale, therefore, was 8 *fên* 分 to 100 *li* or 1:2,250,000.

2) The map mainly represented China proper, including the western half of Korea on the east, the western boundary of *Yun-nan* 雲南 province on the west, the northern half of *An-nam* 安南 and the Island of *Hai-nan* 海南 on the south, and the northern part (stretching outward about 600 *li* according to the then standard measure) of *Khara-khorum* 和寧 on the north. Viewed from the grid of 100 *li* to the division, there were 91-92 divisions from east to west and 89-90 divisions from south to north.

3) The map was under no influence of Islamic cartography in point of its figure and map-making method but based upon the traditional principles of Chinese cartography, with the characters of historical maps fully realized.

4) By *Chu Ssu-pên's* map, the riverhead and upper reaches of the *Huang Ho* (Yellow River) discovered as a result of *Tu Shih's* 都実 expedition in A. D. 1280 was represented on the general map of China for the first time. The *Chu Ssu-pên's Ho-yüan-chi* (河源記, Record of the Source of the Yellow River), was a laborious work written by him with this in view

Development and Stagnation of Rent-Collecting System in

Kusô-Kuryô-shô 供僧供料莊 of *Tôji* 東寺

97

Yoshihiko Amino

The rent-collecting system in *Kusô-Ryô-shô* 供僧料莊 of *Tôji* 東寺, rehabilitated since the *Ennô* 延応 era, was established in the *Kenchô* 建長 era. Control of *Shô* 莊 by *Kusô* 供僧 developed by the unrest of